



世田谷文学館友の会

会報 第58号

2020年12月11日
 世田谷文学館友の会
 〒157-0062
 世田谷区南烏山1-10-10
 TEL 03-5374-9111
 FAX 03-5374-9120
 ホームページ
<http://setabuntomo.net/>

ブレイディみかこと村上春樹

平尾 隆弘

春から続く自粛生活の下、しきりに心をよぎった二冊の本がある。ブレイディみかこと『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』と、村上春樹『猫を乗てる』。読んだのは去年だけれど、コロナ禍に出会い、両著が、どこか予言的な響きを持つように思えてきた。

ブレイディみかことは英国ブライトン在住。アイルランド人男性と結婚し、一人息子がいる。息子は名門小学校の生徒会長まで務めた「いい子」のだが、本人の希望で「元底辺中学校」への進学を選ぶ。『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』は、その息子の中学生生活を中心にした母と子のレポートである。中学校に「ライフ・スキル教育」（公民教育）という課目があり、某日、息子は「期末試験の最初の問題が『エンパシーとは何か』だった」と打ち明けた。

《配偶者が言った。
 「ええっ。いきなり『エンパシーとは何か』とか言われても俺はわからねえぞ。(中略)で、お前、何て答えを書いたんだ?」

その答えが振るっている。彼は、
 《「自分で誰かの靴を履いてみる」こと、って書いた》

と言ったのだ。いかにも優等生の回答!と思うなかれ。本書を読めば、彼が文字通り「エンパシー」の持主であり、かつ実践者でもあることがよく分かるだろう。著者は、エンパシーとシンパシーを比較して、

《シンパシーのほうはかわいそうな立場の人や問題を抱えた人、自分と似たような意見を持つている人々に対して人間が抱く感情のことだから、自分で努力をしなくとも自然に出て来る。だが、エンパシーは違う。自分と違う理念や信念を持つ人や、別にかわいそうだと思うえない立場の人々が何を考えているのだろうと想像する力のことだ。シンパシーは感情的状態、エンパシーは知的作業とも言えるかもしれない。》

と書いている。進化論的に言えば、エンパシー（共感）よりもシンパシー（同情）のほうが目的性があり、高位にある情動だそうだ（山極寿一）。しかしこの際、優劣はどちらでもない。コロナは人と社会のあらゆる「つながり」を断ち切ろうとする。我々は、フィジカルな接触（個人的接触）を避けつつ、メタフィジカルな接触（社会的連帯）を求められている。私は、自然に生じる「シンパシー」と同時に、社会的想像力としての「エンパシー」が大切であることを教えられた気がした。十一歳の子どもの「誰かの靴を履いてみる」と」という言葉によって。

村上春樹『猫を乗てる』は、疎遠な関係にあった父親の足跡を辿りなおしたエッセイである。父親の死後、彼の表情や言葉が「あれはこういうことではなかったか」と新たに甦ってくる。誰しも思い当たる、懐かしい人の懐かしい記憶を喚起される本なのだが、ラストに置かれたエピソードにも心打たれた。春樹少年の家で飼われていた「白い小さな子猫」

の話である。

ある夕方、子猫が家の松の木に登り、てっぺん近くまで登って降りられなくなった。梯子も届かない高いところ。父親に助けを求めても手のうちようがない。子猫は必死に鳴き続けていたが、やがて暗闇があたりを包む。翌日の朝、鳴き声は聞こえず、子猫の姿も消えていた……。村上春樹は書いている。

《それはまだ幼い僕にひとつの生々しい教訓を残してくれた。「降りることは、上がることよりずっとむずかしい」ということだ。》

「降りることは、上がることよりずっとむずかしい」——最初この言葉に触れたとき、私はいつせいにリタイアしつつある、団塊の世代を頭に浮かべた。少年少女時代に高度成長を経験し、「失われた二十年」を経て老境にさしかかった我々の世代を。それは同時に、停滞する日本社会のメタファーでもあろう。しかしコロナの現在、日本ばかりでなく全世界が、「降りる」ことの難しさに直面している。資本主義に不可欠な、成長・進歩・発展の帰結をコロナ菌があぶり出したのだから。人間と人間との関係、人間と自然との関係は、さまざまな形で問い返されている。明解な答えはない。私は「人類が理想としてきた天国にも浄土にも、進歩や発展や競争はない」（見田宗介）という指摘を思い出しながら、相変わらずの自粛生活を続けている。「降りることは、上がることよりずっとむずかしい」という言葉が、何度も心をよぎるのである。

(友の会会員)



第三五回(二〇一九年度)世田谷文学賞入賞作品

短歌部門(秀作) 平野英輔

ひりひりの日々にきよなら少しづつ明るい方へ仰げば尊し

いつまでも自分のことだけ言えなくて「またハゲたねえ」とだけ言いに来る

俳句部門(佳作) 富山 勉

柿葎屋根より湯気や夕立あと

俳句部門(佳作) 堀 恭子

春日和母の財布の鈴の音

川柳部門(秀作) 且味香子

目が合っちゃちょっとうれしい雨やどり類に雫きつと泣いてる夢の中

川柳部門(佳作) 岩崎能楽

沸点を上げて娘の彼に会う

詩部門(二席) 石川厚志

「祭りのあと」

詩部門(秀作) 南雲和代

「林檎」

随筆部門(一席) 山田みさ子

「ヨロン(与論) 島から」

《注》第三五回世田谷文学賞入賞者から友の会会員の入賞者と、短歌、俳句、川柳部門は作品もご紹介いたしました。

なお、入賞作品は『文芸せたがや』(No.三五 二〇二〇・三刊行)をご参照ください。

世田谷文学賞は、世田谷文学館が、短歌、俳句、川柳、詩、随筆の部門で隔年募集します。応募資格者は、世田谷区内在住、在勤、在学の人、および世田谷文学館友の会会員です。

「友の会俳句鑑賞会」二百三十一回目を迎える

藤野 寛

友の会俳句鑑賞会は、友の会発足当時から続く地道で息の長い活動です。自粛期間となったこの半年も毎月投句をして楽しみました。漸く十月二十七日、久しぶりに文学館講義室に一同会し、第二三一回目の会を開催。間隔を空けて座るも、やはり直接顔を突き合わせての活動は元気が出ます。ここに参加者の自作句や鑑賞句をご紹介します。

(自作句) 新井圭子

満月や妣の齢を疾うに過ぎ

(自作句) 中出清治

不忍や弁天のこし蓮の海

(自作句) 内藤葉子

秋の雲グランドうえに橋かかるごと

(自作句) 味元寿喜

沿線の立退き跡地すすき揺れ

(自作句) 中古苑生

曼珠沙華親なき庭を賑わせる

(自作句) 水口明敏

病妻と来し小公園や鯛雲

(自作句) 齊田裕子

深川に芭蕉偲びて虫の秋

(自作句) 柴田悦子

いわし雲碧いミライが走り込む

(鑑賞句・山口誓子作) 森元弘美

秋の雲はてなき瑠璃の天をゆく

(鑑賞句・松尾芭蕉『奥の細道』) 藤野 寛

象潟や雨に西施がねぶの花

(自作句) 石井朱美子

秋の日の釣瓶落としや散歩道

俳句鑑賞会の開催日などは「おしらせ号」でご案内します。ご興味のある会員は是非ご来館ください。

〃 平屋に住みたい 〃

堀江 敏幸

世田谷のはずれの、環状線と幹線道路に近い一画にうづくまる集合住宅に暮らして、そろそろ二十年になる。おなじ町内のべつの区域にいた数年を足せば、ほぼ四半世紀。時の流れの速さに呆然とする。東京の北部から西南部に位置する土地に移り住んだとき、日差しがずいぶんやわらかいことにまず驚かされた。ほんの少し南にくっただけで、こんなにも光の表情がちがうのか。その光に導かれるように、私はあちこち歩きはじめた。緑がたくさん残っている。公園の樹木だけでなく、かつての豪農とおぼしきお宅の庭の木々や、保存樹木に指定されているような立派な櫟があり、手入れされた畑の作物や果樹が、陽の光をさらにほぐしてくれた。

そういう光には、平屋が似合う。子どもの頃から平屋が好きだった。木枠の古い硝子戸からすきま風が入り、真鍮の中折れした捻締めねじりの鍵をしつかり回してもがたがた鳴るような、変哲もない町営住宅みたいな一戸建て。地方で過ごした少年時代の行動半径には、マツチ箱みたいな小さな平屋が等間隔にらんでいる区域があり、小学校の友だちが住んでいたのによく遊びにいった。家と家のあいだの路地や玄関前に白っぽい砂利が敷かれ、ゴム底の運動靴で歩いてもじゃかじゃか派手な音がする。遊びに行くと、玄関口で名前を呼ぶ前にその砂利の音だけで迎えに出てくれる、漠然としていたけれどたしかに存在する近きがあった。

世田谷を歩いていると、身体感覚をとまなつた過去

へのスライドを許すような、愛すべき平屋にしばしば出くわす。高すぎず低すぎず、土の上に控えめに建ち、空の広さを否定しない平屋には、集合住宅による制空権の争いにはぜったい参加しない頑固さと、時代に取残されたというひげめの相半ばした、ゆるやかな均衡があつて、私はそこに惹かれていくらしい。

一八歳のとき、大学入学のために上京して、新宿の片隅にあつた木造モルタル二階建てのアパートの一室を借りた。大学近くの古書店街に興奮して、均一本の棚から毎日のようにこっそり文庫を買っているうち、あつという間に生活のための空間が消滅した。どこか広い部屋に移りたい。思い切つて一戸建てにしたらどうか。ただし小さな平屋建ての。

近所の不動産屋を冷やかしながら半分に覗いていると、世田谷のはずれに、なかなかいい物件があつた。六畳に四畳半、台所とトイレ、そしてお風呂もついている。小さな納屋も使つていいというので色めき立った。家賃は要相談と記されていたので、勇を鼓して中に入ると、まずは外観の写真を見せられた。向井潤吉の絵に出でくる品のいい農家ようだった。これはいい。しかし、貧乏学生の話を受容しつづけてから不動産屋が示した家賃は予想の倍以上で、さすがに諦めざるをえなかった。

かつてのあぜ道をつぶした、くねくね曲がる小径をうろついていると、そんなむかしのことを思い出す。コンクリートの家に閉じこもつていても、私はまだこの世田谷の地で平屋に住む夢を棄ててはいない。

(作家)

作家紹介 一九六四年、岐阜県生まれ。著書に、『おぼらばん』『熊の敷石』『雪沼とその周辺』『河岸忘日抄』『その姿の消し方』他多数。世田谷区在住。

ヨソの文学館・記念館

【福井県ふるさと文学館】

福井駅から文学館まで十五分程であれば、炎天下三〇分毎の無料フレンドリーバスを待つよりはタクシード、と。車窓は一気に広大な田園風景に変わり驚く。大きな川(足羽川・あすわがわ)は豊かな水を湛え川面をキラキラさせてゆつたり流れ、懐かしい夏ののどかな気配に束の間癒された。正面玄関に降り立つと、なんとも大きな建物(全敷地面積約七万平米、地上五階・地下一階)である。館内の左奥に目をやると大閲覧場にかんりの人が机で読書やら、うろろろ閲覧しているやら、まるでスーパー図書館だ。手前右のゾーンでは、あらら、赤いだるまちゃんだるまちゃんの原画(複製)が陳列されている。加古里子(かこさとし)の絵本ではないか。どうしてここに? 吸い込まれるように進むとそこが文学館、入館料はありませんとの案内。新設時に「福井県立図書館」・「福井県文書館」・「福井県ふるさと文学館」の三館が併設され、県民はそのメリットを享受しているという。同図書館の入館者数は、新設された二〇〇三年度以降、都道府県人口比で十年連続全国一位。加古里子は武生(現・越前市)で生れ育ち、小学校二年生の六月に兄の進学を機に東京に移り住んでいた。終戦の年に東京帝大に入学するまでの軍国教育を悔いた加古の原風景は福井にあったのだ。訪問の年(二〇一八年)五月に逝去(享年九十二)、展示は「追悼 加古里子さん」展であった。福井ゆかりの代表作家の常設展ゾーンでは映像や音声資料も充実している。代表作家のひとり、津村節子氏(福井市出身)は同文学館館長である。ここ福井のように大いに工夫して文学活動を推進できればと希望が湧く。

住所 福井県福井市下馬町五一―一
電話 〇七七六一―三三三八八六六

(友の会会員 幾田充代)

司馬遼太郎の長編『胡蝶の夢』にはコロナならぬコレラ騒ぎが登場する。一八五八年の大流行時には「江戸だけで、七月から九月までのあいだに二十六万人の患者が出た」という。前年に来日して長崎の医学伝習所で蘭方を教えていたポンペは、率先して治療に当たった。「この（長崎）六万の市民の中にあつて、ただ一人の専門家であつた」と回想録で述べている。「ひとびとは私を必要としている」「病人を救うのは医師としての義務である」と、患者の地位・身分を問わず往診を重ねるポンペの振る舞いは、当時の日本人にとっては衝撃だった。

伝習所の彼の学生たちは、「先生の診療は、幕府の役人にかぎられるべきである。それは、オランダ国の直参の士官である先生の御身分と、患者である幕臣との身分のつりあいがとれるからである。最下級の身分の患者を診療されることは、御身分にかかわる」と、当初はほとんどがこれに反対した。このようなポンペの言動は「そのまま日本の身分制社会をきり裂く痛烈な思想として受け取られた」と司馬は書いている。

徳川幕府が二百五十余年をかけて練り上げてきた、堅牢稠密な階層的な社会体制に、風穴を開けてゆく役割を演じるオランダの医師と、彼から教えを受ける蘭方医たちの群像が生き生きと描かれた素晴らしい作品だ。

流行病といえ、次に連想されるのは一九一八年から二〇年にかけて世界で五億人が罹りその一割が死んだといわれる「スペイン風邪」だろう。日本で

も死者は四十万人前後に及んだという。一九一九年四月、志賀直哉は『白樺』に「流行感冒と石」という短編（のちに「流行感冒」と改題）を発表している。幼い娘の世話を頼んでいる女中の石さんが、スペイン風邪流行の最中、人との接触を避けよ、という「私」に逆らつて、小学校校庭に小屋掛けして興行する夜芝居を見に行き、しかも行つてない、とシラをきる。娘も妻も自分もどこから感染するが、それでもシラをきり通しの石に腹を立て、暇を出そうと思つたが、それも……と怒りと自製の交錯する心理の機微を描いて現在の私たちの共感を誘う。

『ホット・ゾーン』から『夏の災厄』へ
坂田 美代子

疫病についての書籍で思い浮かぶのは、リチャード・プレストン（高見浩訳）によるエボラ出血熱を描いたベストセラー作品である『ホット・ゾーン』であり、直木賞作家の篠田節子による『夏の災厄』である。前者は一九九四年発行のノンフィクション・スリラーであり、後者は一九九五年発行のパンデミック・ミステリーである。

同じ病の流行については、与謝野晶子に一九一八年十一月の「感冒の床から」、二〇年一月の「死の恐怖」という、小新聞に寄稿した二つの短い論考がある。前者から一部を。

……どの幼稚園もどの小学校や女学校も生徒が七、八部通り風邪に罹つて仕舞つた後に漸く相談会などを開いて幾日かの休校を決しました。盗人を見てから縄を縛うといふような日本の便宜主義がかう云ふ場合も目に附きます……

もしかしたら安倍前首相、これを読んでいたのかな？

（友の会会員）



『ホット・ゾーン』は、当時ベストセラーとなり映画化もされ、どちらかといえば映画「E.T.」以降初めての『画面中防護服であふれる映画』の方で有名であるかもしれない。現在も未だ治療法が確立していないエボラウイルスの感染拡大と、封じ込めに命をかけて取り組んだ医療従事者の闘いの物語である。アフリカ大陸の奥地の洞窟から広まったかと思われる致死性の高い未知のウイルスとの闘いを、患者、医療従事者、生き残つた者と、一人一人にフォーカスして人間の物語として重厚に織り上げている。

そしてまた、本来ならば一地方において収束するべき疫病が、現代（一九九四年当時）の世界情勢と人々の思惑と作為により、世界中に広まっていくことの警鐘としても考えさせられる出来事である。

一方の『夏の災厄』は、東京郊外のニュータウンで起こる、絶滅したはずの日本脳炎によく似た症状の原因不明の疫病の発生から始まる。高い感染率と致死率そして酷い後遺症。感染防止と原因究明に奔走する保健センター職員、医療従事者。国の無策と郷土病指定の地方自治体丸投げ、パニックとともに、

いつ終わるかもわからない状況が、人々の生活も心もじりじりと蝕んでいく。地域差別が広まり自殺者も出て、ロックダウンへと進む。

まるで、現在の新型コロナを預言しているかのよ
うな作品である。当時多摩地区の自治体職員であつた著者が、時系列的に前者の著作に触発されて日本に置き換えて創作された作品であろう事は、容易に推測される。

四半世紀を経てそれがSFでも何でもなく現実となつているパンデミックの恐怖。二十五年の年月は何だったのか。

『夏の災厄』ではパンデミックは夏の終わりともにも終息に向かつていく。コロナは「冬の災厄」と当初言われていた。夏を過ぎて益々広がっていく現状に、果して答えはあるのだろうか。

(友の会会員)

エッセー「わたしの一冊」の原稿募集中!

- ・タイトルに本の題名(著者名・出版社名・出版年も)明記
- ・あなたのお名前、連絡先を明記
- ・字数は六〇〇字以内(厳守)
- ・文意を損なわない範囲で編集させて頂く場合があります
- ・原稿はお返ししません
- ・会報に順次掲載しますが、頁数の関係で掲載が遅れる場合があります
- ・原稿は友の会に郵送かFAXでお送りください
- ・掲載は一人一回

あふれる蔵書から

川和 孝

この四月から、コロナにより禁足状態が続き腑抜けの人が多くなつた筈である。

私も四月に公演を予定していた舞台が稽古途中で中止になって、生れて初めての体験をしたが、いつまでもぼやいていても仕方ないので、家中にあふれる蔵書の中から手当たり次第読むことにしたのだ。

久保栄の残した『小山内薫』(影書房、二〇〇九年復刻再刊)に続いて、小山内薫の次男宏と結婚した小山内富子の書いた『小山内薫―近代演劇を拓く』(慶應義塾大学出版会、二〇〇五年)を読んで、生ける日本新劇史ともいえる小山内の周辺を再確認出来たのは幸いだった。同時に戯曲『息子』(東光閣、一九二四年)を九四年秋に演出した際、墓参した多磨霊園の小さな墓標を思い出した次第。

個人的にも会つたことのある故・三遊亭圓生の『書きかけの自伝』(旺文社文庫、一九八五年)も「芸に終りなし」「高座はこわい」など短文だが改めて同感した内容だった。

新刊書では『評伝 一龍齋貞水―講談人生六十余年』(岩波書店、二〇二〇年)という塩崎淳一郎の貞水のすべてというべき文章に、現在の講談界の第一人者の姿を見ることが出来たのと、落語に比べて講談の世界の弱くなつた点も認識出来、改めて貞水の生の舞台に足を運びたくなつた。

幸田文の作品も沢山あるが、『父・こんなこと』(新潮文庫、改版一九五五年)を久し振りに読み、露伴の死の直前の描写は生々しく、よくもあんなに書けるものだと、私の父の死のときと重ねてしまった。

小学校卒の作家ですばらしい作品を残した人が何人も存在するが、そのどの小説も感動的ではざらざらと常に思っている。山本周五郎の『おさん』(新潮文庫、一九七〇年)をはじめ、『ひとごころ』(新潮文庫、一九七二年)、『人情裏長屋』(新潮文庫、一九八〇年)、『やぶからし』(新潮文庫、一九八二年)などの短篇集は読み易く、多彩な世界が描かれていて、再読、三読に値する。

松本清張の諸作品もどれも驚くべき作品で、長編、短篇共にすごい迫力があつて読了まで目を離せなくなつてしまう。私が作つた新潮カセット・ブックで『愛犬』／『足袋』(新潮CD)単行本二〇〇一年)を録音した際、電話で話した声が忘れられない。短篇小説の名手である永井龍男も代表作『青梅雨』(新潮文庫、一九六九年)をはじめどの作品もすばらしい。彼は神田生れの江戸ッ子で小学校だけの学歴だが、愛読している一人だ。

次々と挙げればきりが無いが、吉川英治も大変な仕事をしている作家で、小学校だけしか出ていない。『宮本武蔵』(全六巻、大日本雄弁会講談社、一九三六―一九三九年)や『三国志』(全十四巻、大日本雄弁会講談社、一九四〇―一九四六年)、『鳴門秘帖』(全二巻、大阪毎日新聞社・東京日日新聞社、前編・一九二七年、後編・一九三三年)などの長編も面白いが、『忘れ残りの記』(文藝春秋新社、一九五七年)の文面から彼の人間性が読みとれて親しみを感じるのには私だけではない。『われ以外みなわが師』と言う人柄が魅力的である。

古本屋さながらの我が家には死ぬまで読みきれない量があつて困っている今日此の頃の私。
(演出家・友の会「朗読を楽しむ会」元講師)

巨匠たちが描いた疫病禍

堀 伸雄

自粛の日々の慰みに、これまでに録画しておいた映画の中から、疫病を主題にした作品を探してみた。

まずは洋画。イタリアの巨匠ルキノ・ヴィスコンティ監督『ベニスに死す』（一九七一年公開）。原作はトーマス・マン。老音楽家がベニスを旅行中に出会った貴族の美少年を追い求めるうちに、コレラに感染し死んでいく。エリア・カザン監督『暗黒の恐怖』（一九五〇）。ニューオーリンズでペストに感染した密航者の殺人事件を巡り、感染防止と事件捜査との狭間で苦闘する公衆衛生医師が描かれる。圧巻はスウェーデンの名匠イングマル・ベルイマン監督『第七の封印』（一九五七）。ヨハネ黙示録に基づく深遠な内容だ。中世のスウェーデン、十字軍の遠征から帰還した一人の騎士が遭遇したのは、ペストに蹂躪された祖国の悲惨な光景。彼は神の存在と己の信仰を確認すべく、死神とのチェスに命を賭ける。邦画では、深作欣二監督の超大作『復活の日』（一九八〇）がある。原作は小松左京のSF小説。細菌兵器として開発された新型ウイルスの拡散で世界が破滅していく恐怖を描いている。次に、黒澤明が一九七七年に執筆した壮大な脚本『黒き死の仮面』を紹介したい。岩波書店「全集黒澤明 最終巻」に掲載されている。原作はエドガー・A・ポーの短編『赤死病の仮面』。黒澤は原作の耽美的魅力を生かしつつ、架空の疫病（赤死病）を、中世欧州史に陰惨な傷跡を残した（黒死病（ペスト））に置き換え、極限下に置かれた人間の赤裸々な姿を活写した。

中世のロシアと思われる地方にペストが蔓延。貴

族や聖職者など特権階層だけが城主ドブロフスキー侯爵の治める安全な城に逃げ込める。城外は死屍累々たる世界。侯爵は城内への疫病の侵入を遮断すべく城門を溶接。城外を覗き見た者は死罪、"ペスト"の言葉を発した者も死罪。領内の死者の埋葬や感染した村を焼き払う任務を遂行した親衛隊でさえ、帰城を拒否され、荒野を彷徨った挙句、次々に感染死する。死の恐怖から利他的となった城内は酒池肉林の坩堝と化す。侯爵は聖職者の進言には一切耳を貸さない。神への不信を募らせ、悪魔の力にすがって災厄から城を守ると豪語し、奇怪な仮面舞踏会を開く。しかし、侯爵夫人の発熱を機に城内感染の風評が拡散、城の中は疑心暗鬼のパニックに陥る。青年貴族による反乱が勃発。城は放火され、城壁に殺到する人々が圧死、墜死する中、やがて（黒き死の仮面）ペストが侵入、登場人物は全て死に絶える。

黒澤明が残した詳細な創作ノートには、ドストエフスキー『死の家の記録』『悪霊』やカミュ『ペスト』等への言及も読み取れる。絢爛たる仮面舞踏会の演出を親交の深かったイタリアのフェデリコ・フェリーニ監督に要請、フェリーニも乗り気だったようだ。一部のアニメ化を手塚治虫とも相談したが、諸々の事情から映画化は実現せず、幻のままとなった。今年には日本映画の国際化に先鞭をつけた黒澤明『羅生門』（一九五〇）の公開七〇周年。その歴史的節目の年に、図らずもこの脚本が注目される事態に至ったのは何の因果か。救いのないシリアスなストーリーは、「ウィズ・コロナ」の時代に直面する我々に対し、「現実を直視し理性をもって臨め」との泉下の黒澤明の警鐘かもしれない。

（友の会会員）

わたしの一冊
『あたりまえのこと』
白井 吉見著
新潮社
昭和三十二年刊行
中村 千栄子

この本をずっと大切に思っていました。昭和三十二年発行の随筆です。私の生まれる数年前の本です。当時の政治や教育、文学のことなどが綴られています。

中学三年の夏休みでした。私は暇を持て余し、家の本棚を物色しました。軽い装丁で題名も平明なこの本を手に取りました。目次の始めは「薄弱な精神風俗」です。これは大人の読み物だと思いました。けれど、日本語で書かれているのに読めないというのは何か悔しかったのです。理解できない部分が多かったけれど、最後まで読みました。その時、思ったことがあります。それは、この本は著者にとっての「あたりまえのこと」が書かれているということ。人には人それぞれ「あたりまえ」があるのだということ。「あたりまえ」という使い慣れた言葉が広がったようでした。言葉と初めて向き合った気持ちになりました。私の言葉の世界を広げてくれた一冊です。この度、久しぶりに読み返しました。この本の中には当時の日本が映し出されていました。変わってしまったこと、変わらないこと、時を経て今に至ることを改めて感じます。

読書について著者は「必読の書、枕頭の書の時代が去って、教育のための時代が来た。（中略）現代の読書は遍歴から彷徨へと方向かも知れぬ。彷徨ならまだしも、アクセサリーであり、時の話題への参加のためである」と述べています。

令和の現在の読書とは、を考えています。
（友の会会員）

友の会入会のきっかけは、この会の活動に長く関わってこられた敬愛する旧友からのお誘いであった。初めて訪れた文学館は左手にお屋敷の御門、右には櫛の木立があり、落ち着いた佇まいに安堵した。館内の大きなガラス張りの一面から、色も見事な鯉の群れが池にゆったりと揺れ動くのを目にすると、都心の喧騒を離れた心身のオアシス空間を実感した。それからはこの会の数々の講座の質の高さ、興味をひく企画にいつもわくわくして出かけ、これまでの体験にはない貴重な充実した時間をいただいていた。

会員の執筆による会報には、講座内容の要旨、文学散歩で辿った文士縁の地や作品の舞台の解説、他の文学館の紹介まであり、読み応えのある誌面作りを経験豊富な編集陣の並々ならぬ力量が拝察される。どの講座も知見を広げ、思考を促してくれた。中でも俳句を少しかじった頃、言葉にならない衝撃を受けたのが、「水脈の果て炎天の墓碑を置きて去る」という句であったので、卒寿を遙かに越えた金子兜太氏の講演「体で生きてきた」を聴講できたのは僥倖であった。氏は率直に、時にユーモアを交え、俳句論の一端や選句をされた「平和の俳句」などを自在に語られた。死線を越えて熱く生きてきた人の放つ存在感が強く印象に残った。

澤地久枝氏の「石牟礼道子」かなしみ”の表現”の講演も忘れがたい。『苦海浄土』の石牟礼道子氏へ

の謙虚な深い洞察に打たれた。幾度も手術を乗り越えて、九条の会や「アベ政治を許さない」の発案にいたる活動を支えている強靱な精神力は、一体どこからかと思うほど、目前の氏は上品で華奢な方だった。氏の著書をさらに読む必要を感じている。

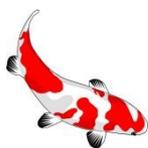
散歩に関して特筆すべきは、担当の方々が案内に先立ち現地調査をされ、休憩や昼食の時間と場所等を入念に検討されていることである。お陰でこれまで果たせなかつた向島、雑司ヶ谷と青山の霊園も廻ることができた。文学散歩は感性の良い刺激となっている。

最後に友の会を支えてくださる優れたボランティアの方々への敬意と感謝を捧げます。

（友の会会員）

” 世話人会から友の会へ ”

竹内 希衣子



蘆花公園駅から世田谷文学館に向かって歩き出すと左側に「ウテナ前」という京王バスのバス停があります。今はもう跡形もないウテナ化粧品工場と創業者の見事な邸宅があった場所に、東京都で初めての近代総合文学館が建てられたのは一九九五年のことでした。先の戦争の前後、現在の宇名根にあった「わかもと製菓」と「ウテナ化粧品」は国策工場として青年学級の名のもとに十代の若者たちが勤労働

員され過酷な労働を強いられた場所だったので。『せたがや女性史』の編纂に関わったことからそんな経緯を知るようになりウテナと文学館は私の中では重なるようになりました。

文学館の開設にあたって資料の収集に奔走された故菊池宗孝さんの知己を得て開館の後、世話人会が発足する折にお誘いを受けて参加するようになり親密度は増しました。

当時の学芸部長は生田美秋さん、世話人会の担当は瀬川ゆき現学芸部長。世話人会には児童文学の岩崎京子、女性史の折井美耶子、映画監督の高瀬昌弘、『薔薇族』創刊者の伊藤文学さんなど多彩な顔ぶれの他に区の文化財関係、地元の方など二十人以上の方たちが名を連ね、時折会議をしていました。発足四年後の一九九九年二月に世話人会は発起人一同として翌年度四月に向けて「世田谷文学館友の会」発足の段取りができていきました。やはり菊池さんが大活躍されて、事務局長をつとめ、後に田中映子さんにバトンタッチされました。

二〇〇五年四月、八百人の会員を得て、規約改正を行い、竹内修司氏が初代会長になり、以後文学散歩や講演会など多様な企画や活動が展開され続けています。

折に触れて展覧会や講座で訪れる度に、世田谷区で育ち今も住んでいる私にとって、ここは特別な場所だという思いが浮かびます。蘆花公園駅に下車するようになって二十年余り、歩きだしてバス停の標識をみると懐かしく、文学館の玄関前の池で元気に泳いでいる長寿の鯉たちをしばらく眺めていると、この地に世田谷文学館があることがうれしくなります。

（友の会会員）

世田谷文学館への小径は夢幻の世界へ

黒羽 英二

八幡山を出て、左カアヴで滑り込む芦花公園駅を降りて、今はエスカレーターで昇って改札口を通り、再びエスカレーターで、時にはエレベーターで京王線の踏切を背に、スーパを右手に、郵便局を左手に進むと、右手にウテナ前のバス停が眼に入り、たちまちウテナの工場が目立った敗戦前の世田谷に心が飛んでしまう。

昭和二十年八月十五日に、「天皇の玉音放送」を、中学二年生の耳で聴いた。それができたのは、私達昭和五、六年生まれから、大ざっぱに見ても、昭和十三年生まれの年代の者たちだったのではないかと。上は中学三年から下は小学一年までの、学校へ通っている子供たちであり、中学四年から上は、大人として戦場に立つ覚悟を迫られ、就学前の五、六歳では、自分なりの考えを持つには無理があるのではないか、と思っただけである。

ウテナ工場前の坂を降って、由緒ある旧家の門前を流れる小溝の水に涼を覚えた先に通い慣れた簡素な、ガラスの入口があつて、いつの間にか入っている、というのが世田谷文学館だが、時には、幾つかの建物や庭園を訪れては、遠廻りして一般道の細く曲折した曲り角を味わいながら、時間をかけて歩くこともある。

多くは、勝手知った小道を急ぐ場合が多く、その目的地の第一は、通称「芦花公園」＝「蘆花恒春園」である。今でも思い出されるのは、言わずと知れた

明治の文豪、徳富蘆花を記念して、トルストイアンでもある蘆花が、当時としては田舎の世田谷へ居を移して晩年を過した家屋と庭へ二度三度と連れて行って、小説や随筆の解説をしたのが母だったことだった。

父が軍属としてシンガポールへ出向して不在であり、勤労働員で木製飛行機製作工場へ通っていた三歳年上の兄は江田島の海軍兵学校へ入学し、母子二人で世田谷四丁目の留守官舎暮らしとなった。その時に買い出しの野菜等農家から分けてもらいに時々訪ねていた土地であり、何よりも兄と私の二人が通った都立千歳中学（現在の芦花高校）が近くにあって、千歳鳥山駅までの二十分弱の細い凸凹の田舎道を思い出して確かめに廻ってくるのだ。（友の会会員）

筆者紹介

一九三二（昭和六）年東京生まれ。小学四年の十月（第二次世界大戦の二ヶ月前）から世田谷小学校、都立千歳高校、早稲田大学（英文）卒業後は東海大学附属相模高校教諭として定年まで勤務。小説『目的補語』（文藝賞）、詩『須臾（しゆゆ）の間に』（小熊秀雄賞）、戯曲『女化（おなばけ）』他に神奈川戯曲賞、英文詩集にインドのミレイニアム賞等受賞。

「避難住宅」に住んでいた頃

土屋 春美

私は北海道で生まれました。

両親は二人とも開拓農家出身で、結婚して六日程は山で畑作農家をしていましたが、子供を町中で育てたいと、離農し町にきました。

町に住んで一年もしないうちに、近所の子供の火遊びから町史に残るほどの大火になり、私たち一家

六人も巻き込まれました。

その頃、町には「避難住宅」とよばれる、四軒長屋が何棟も並ぶ地域がありました。住宅には、戦後樺太や満州から引き上げてきた人、朝鮮から労働者として日本に来て、そのまま国には戻らず町に住んでいる人、戦争から命からがら帰ったものの、家をなくしてしまった人、火事で焼け出された人などが家族で暮らしていました。私達家族も住む家が他に見つからず、その避難住宅に入ることになりました。

そこに住む人達は、裸一貫から暮らし始めた人ばかりで、言うなれば町の中で経済的に弱い立場の人の住むところでした。私達一家が火事で焼け出されてきたことを聞きつけた同じ集合住宅に住む人達が、自分たちも貧しいのに、食べものや台所用具、服や靴などを持ち寄ってきてくれたのです。そして、その日からすぐに同じ町内の仲間と認めてくれ、困ったことがあると、必ず誰かが助けてくれました。

そこに住んでいた二年ほどの間は、生活は苦しかったにもかかわらず、私たち一家にとっては、人の温かさにも包まれて、まるでパラダイスにでもいるような幸せな時代でした。

その幸せな場所を去らなくてはならなくなった理由もまた火災が原因でした。避難住宅の大部分が焼け、住んでいた人々は散り散りになりました。

今思えば最初の火事がなければあの避難住宅での生活はなかっただろうし、再びの火事に遭わなければ、まだあの温かい人達と過ごす日々は続いていたのかもしれない。

二つの災厄の間にあつたあの避難住宅での日々はまるで映画のロケ地に迷い込んででもいたかのよう思うところがあるのです。（友の会会員）

東京の西部に浅川という川がある。川は陣馬山付近を源に日野台地、多摩丘陵に挟まれ、やがて多摩川の本流と合流する。その合流点の八〇〇メートルほど手前にある「まちの生ごみ活かし隊」(せせらぎ農園)に行った数年前十一月初旬のことである。「都市を生ごみで耕そう!」の合言葉。畑では、人参・カキ菜・ホウレンソウ・たまねぎ・長ネギ・大豆・レタス・水菜・カブ・茄子・ヤーコンなど多品種栽培。広さは四〇〇坪ほどあり中心部を豊かな水量の用水路が流れている。

「カブ」「ニンジン」「ナス」「ミズナ」「オクラ」などを試食。根菜は土をぬぐい、葉物はちぎってそのままガブリ。どの野菜も滋味がありスーパリーの野菜とは全く違いその野菜本来の味を知ることができ感動。市内二〇〇軒の会員から毎週二回、生ゴミを集め土に還す作業をしているとのこと。

感慨に浸っている間に、畑の端に止めてあった生ゴミを積載したダンブが動き出し、作業開始となった。幅二・五メートル長さ二〇メートルほどの約半分を覆っていた一週間前の生ゴミを埋めた部分の上のネットとブルーシートをはがし土にかぶせた枯れ草の布団を大きなフォーク・熊手などでどける、中の温度はおおよそ四〇度になっており触れると熱かった。まだ埋めてない部分にダンブから「生ゴミ」をドバツと降ろす。熊手で掻き落とし、半分ほど移動して残りのものを掻き落とす。分解を促進し、臭気を抑えるように調合された「米ぬか」が混合されているとはいえかなり強烈な臭いである。

地表に下ろされたゴミを均等に広げ、耕運機で耕すと水分が土に吸収され、匂いあまりしなくなるという。再び全体にブルーシート、ネットを掛けてペグ(小さな杭)で抑える。お茶の休憩時間、お茶やら漬物やなにやら勧められ、大いに食す。

野菜を作る前に土を作ることの大切さを痛感する。美味しくて身体にいいものは自分で作るしかないと思ったが、実際体験してみると畑仕事は大変である。また大変だから面白いともいえる。改めて自然の恵みに感謝しつつ、多摩の西日に見送られながら帰途に就いた。
(友の会会員)

わたしのお薦め本



三島由紀夫『サド侯爵夫人』

鈴木 美奈子

思い起こせば六十年安保世代の私、国会を囲むデモ隊の中にあつて、現代思潮社版マルキ・ド・サドの『悪徳の栄え』を手にした。そこには反体制の象徴たるサドへの熱い共感が……。あれから半世紀、手にする三島由紀夫の『サド侯爵夫人』にやささか感無量である。

サディズムの語源であり、二十七年間を獄中に過ごし、最後は精神病院で孤独な死を迎えたサド、この破天荒なサドを終始守り続けたルネ夫人はサドが出獄して解放されるとさっさと彼から去ってしまう。ここに人間性のもっとも不可解、かつ、もっとも真実が宿っている。この謎への三島の解釈は、このドラマの最後の場面に展開する。

サドが牢獄で書き続けた『ジュステイヌ』。悪徳と媚態をひけらかす主人公の姉はあらゆる幸福を得て富栄え、しかし神の怒りはこの姉には下らず、美德を守るもあらゆる不幸に出逢う妹、ジュステイヌに下る。こんな話をルネは語り、「ジュステイヌは私です」そして、「あの人(サド)は私のためにこの物語を書いたのです」と云う。この怖ろしい物語を成就させるために苦難の数を重ね、そしてはかない徒労に終わったことを知るルネはこう続ける。「サドは朽ちない悪徳の大伽藍を築こうとし、悪の掟と法則、永劫に続く長い夜、そして鞭の奴隷よりも鞭の王国を作ろうとしたのだが、悪の中でももっと澄みやかな悪の水晶を創り出してしまった」と。光り、もっとも自由な天国への裏階段をつけたサド。

時はフランス革命勃発の頃、ルネは「あの人はやすり一つ使わずに牢を破っていた」と云い、朽ちない悪徳の大伽藍を築こうとし、悪の中でももっとも澄みやかな悪の水晶を創り出してしまったと云う。ルネにとつてのサドは永遠の由緒正しき騎士、天がける白馬にまたがった光の精であった。

そこへ出獄して戻ったサドを伝える召使の言葉、「醜く肥えておしまいになりました。目はおどおどして……何か不明瞭に物を仰るお口もとは黄ばんだ歯が幾本か……」、それは物乞いの老人かと思わせるのに、名乗りだけは荘厳だった、という皮肉な結末。

『悪徳の栄え』のサドこそルネにとつて夢であり希望であり、彼女にとつての王道であったのだ、という大逆転は、『青の時代』を疾走して果てた三島自身のシニシズムを想起させる。

(友の会会員)

文学館友の会の会誌に各地の文学館が紹介されている。私も旅に出て、その街の文学館を訪ねるのが好きである。日本には約一〇三の文学館がある。いままでも約二十三館制覇した。印象に残った文学館を紹介したい。

連れ合いの実家が福岡の郊外にあり、まずは九州から。野上弥生子記念館は生家の大分県臼杵の小手川酒造の一角にある。早熟の文学少女がおさえがたい文学へのおもいを胸に同郷の野上豊一郎を頼って上京する様子が面白い。幼児から九十九歳までの軌跡が展示してある。野上は「個人のモラルや愛の確立なくして人は救われない」という思いを胸に書き続けた。先日鎌倉の東慶寺に参拝したところ、岩波書店の創業者、岩波茂雄のとなり野上弥生子夫妻の墓があった。臼杵には石仏もあり、関さば、関あじも堪能した。レストランの窓からは豊後灘が広がり、湘南の海しか知らない私にはとても新鮮であった。

次に小倉にある松本清張館に行った。松本清張は人生の半生を小倉にすごした。杉並の高井戸の自宅と書斎を再現する形で構成されている。約三万冊を収めた書庫などが、思索と創作の場として配置されている。小倉城とセットで観光することができる。

次に行ったのが、遠藤周作記念館である。遠藤が『沈黙』の取材で訪れた時大変気になった、長崎市外海地区でキリシタンの里とも知られている海辺に建っている。外に目をやると真っ青な角力灘が広がっている。宣教師が命がけで布教のため渡ってきた

様子が目に浮かぶ。遠藤が「神様が私のために残してくれた場所」というだけあって、絶景のロケーションである。文学館から平戸、佐世保をぬけて、連れ合いの実家に帰宅したが、最高のドライブであった。

次は、北に飛んで、旭川にある三浦綾子記念館である。『氷点』の舞台になった、見本林に面した、百年の森に建っている。他の公金や税金で建てられた文学館と違い、全国の三浦綾子ファンの募金で建てられた、私設文学館である。大雪山のふもとにあり、建物の外観も素敵だ。三浦の数々の作品の紹介と、作品のテーマである「ひとは苦難のなかでも希望をもつてどのように生きていくのか」という一貫したクリスチャンでもあった、三浦の素顔が理解できる。

地方まで出向くのはと思われる方には、神奈川県近代文学館がおすすめ。港の見える丘公園の大佛次郎記念館の奥に建っている。春と秋には薔薇が見事に咲き横浜ベイブリッジものぞめて、気分転換ができる。年三回の企画展があり、奥の常設展とともに一日楽しめる。沢山のビデオも所有しており、神奈川県にゆかりの文学者の軌跡をたどれる。

まだまだ紹介したい文学館がありますが、皆様も旅の途中に是非立ち寄ってみてはいかがでしょうか。

(友の会会員)



次号会報「寄稿のお願い」

このたびは、会員の皆さまから多数のご寄稿を頂戴し、お蔭様で十二頁立て「会報第五十八号」を完成させることができました。改めて皆さまの積極的なご協力に心より御礼申し上げます。

さて、次号「会報第五十九号」は二〇二一年五月末の発行を予定しておりますが、本年度下期の催事も自粛せざるを得なかったため、再び会員の皆さまからの自由なご寄稿をお願いする次第です。この機会に大いにご執筆いただけましたら幸いです。左記に要項をご案内しますので奮ってご寄稿ください。

〈ご寄稿要項〉

掲載誌 … 「会報第五十九号」(二〇二一年五月末発行予定)

締切日 … 二〇二一年三月十六日(火) 必着

テーマ … 原則、自由。随筆、物語、詩、書籍感想文。その他、友の会の存在価値や魅力についてなど。

文字数 … 本文870字内(会報一段半に相当)

提出方法 … ご寄稿の際は、友の会専用携帯電話番号(〇八〇—一一五四—一五六二)にお電話をお願いいたします。

ご執筆方法、原稿テーマなどを確認の後、窓口担当者を決定、掲載完了まで対応させていただきます。

夜明けを歩く

石原 佳代子

夜明けの町を歩く

空は灰色 夜と朝の匂いが混じる

草むらで 虫たちが夜の続きを奏でる

歩く人はまだいない

人形のように動かなかつた猫が逃げ出す

空に色が差す

雲は茜に淡く

夜にかくされていた空が水色をとりもどす

家々は寝息をたてて黙す

風のように黒猫がよぎる

五時をめどに 蝉が鳴きはじめる

それは突然 頭上の枝で

いた 手が届く 薄闇に助けられた

この夏 初めて手にした蝉は

身じろぎもせず ミーンミンミンと

指の間で とぎれず鳴いた

透けた羽の下の鎧のような腹が上下に動く

鳴く蝉といっしょに川沿いを歩く

草を両岸にかかえた川は

細い帯となって 蛇行して光る

岸の桜の老木でも蝉が鳴く

その苔むした幹に 手の中の蝉を置く

瞬間 蝉はきりきりと飛んだ
彼は夏を急いでいる

東の空が 濃い茜に染まる

丘の上から見える 遠いビルの窓が光る

日の出だ

茜が一段と濃くなった時

シルエットとなった町の屋根の向うから

雲を押し上げ

ぬめつと 赤い日がのぞく

嘗めたいような その赤は

やがて 凝視させない オレンジの光となる

今日がはじまる 新しい何かが

いつだって 気配の中から

突然 姿を現わす新しい何か

受けとめる覚悟をしながら

夜明けを 呼吸する

(友の会会員)



御礼 友の会活動支援金の「寄付

今夏発行の「おしらせ第一五〇号」において、友の会の活動水準を維持するための支援金のご寄付をお願い申し上げましたところ、十月末現在、四十名(四組のご夫妻含む)の会員の皆さまから総額一八五、五〇〇円のご寄付を頂戴いたしました。誠にありがとうございました。ご寄付くださいました皆さまへ御礼申し上げますとともに、ここに会員の皆さまにご報告させていただきます。

なお、頂戴しました支援金は来年度運営費用として繰り越し、会活動の維持に努めてまいりますので、ご了承ください。

編集後記

コロナ禍が続く中、友の会の活動も会報以外ストップする日が続いています。

その異例な事態の中でも、今号の記事がお蔭様で数多く集まりました。コロナと同じような感染症の作品について書かれたもの、また様々な体験を随筆や詩に書いてくださったものがありました。この状況下で「書く」ということに、皆さまの並々ならぬ熱い思いが静かに湧き出ているのを強く感じます。

改めて、「思いを書く」ことで人と人が繋がることに感動しています。これからも会報が多くの方々の「思い」を十全に伝えられる場にしたいと願っています。

(森 ゆり子)

